

MACF 礼拝説教要旨

2022年9月18日

【収穫は多いのに・・・】

ルカによる福音書 10章1節～11節

10:1 その後、主はほかに七十二人を任命し、御自分が行くつもりすべての町や村に二人ずつ先に遣わされた。

10:2 そして、彼らに言われた。

「収穫は多いが、働き手が少ない。

だから、収穫のために働き手を送ってくださるよう、収穫の主の願いなさい。

10:3 行きなさい。わたしはあなたがたを遣わす。

それは、狼の群れに小羊を送り込むようなものだ。

10:4 財布も袋も履物も持って行くな。途中でだれにも挨拶をするな。

10:5 どこかの家に入ったら、まず、『この家に平和があるように』と言いなさい。

10:6 平和の子がそこにいるなら、あなたがたの願う平和はその人にとどまる。

もし、いなければ、その平和はあなたがたに戻ってくる。

10:7 その家に泊まって、そこで出される物を食べ、また飲みなさい。

働く者が報酬を受けるのは当然だからである。家から家へと渡り歩くな。

10:8 どこかの町に入り、迎え入れられたら、出される物を食べ、

10:9 その町の病人をいやし、また、『神の国はあなたがたに近づいた』と言いなさい。

10:10 しかし、町に入っても、迎え入れられなければ、広場に出てこう言いなさい。

10:11 『足についたこの町の埃さえも払い落として、あなたがたに返す。

しかし、神の国が近づいたことを知れ』と。

12人の弟子の派遣が終わってから、こんどはさらに多い72人の弟子たちが派遣されそれぞれの町に遣わされました。それほど長い期間ではありませんでしたが、とにかく遣わされ、

「出会う人の癒やし」と「神の国の告知」を託されました。

結論から言うと大成功でした。

今朝、2つのことを考えさせられています。

1) 収穫は多いが、働き手が少ない

イエスさまはこう言われました。

「収穫は多いが、働き手が少ない。

だから、収穫のために働き手を送ってくださるよう、収穫の主の願いなさい。」

収穫のときは来ているのに、それを収穫する人がいないという深刻な状況があるということです。収穫のとき、ちょうど食べごろ、ちょうど刈り入れるのに適した時期だというときに、それを収穫する人がいないとその作物は腐ってしまいます。

無駄になってしまうのです。誰かが苦勞して種をまき、誰かがそこまでケアして育て
ちょうどよい時期に刈り取る人がいないというのは不幸です。

これはしかし、私達の日常的な心がけについて教えていないでしょうか。

私達は「おいしいものを食べたい」と思っています。それぞれの時期になったら
それぞれの時期の魚や果物、野菜を入手しておいしくいただきたいという願いを
私達は持っています。それを店先で待っているのです。誰かが持ってきてくれるのを
待っているわけです。流通は、それで成り立っています。

私達は「消費者」になりきってしまっているかもしれません。

生産者の喜びも苦勞もわからないまま、なぜ、あれが出てこない、どうして美味しいものが
まだ店に出ていないのかと不満を言うだけになってしまっているかもしれません。

生産の喜び、収穫の喜びを知らないまま、消費者として生きてしまうのは
実は残念なことだと思います。

これを人の心にたとえて考えてみましょう。

ある人には「励ましのひとこと」があれば元気になる。

ある人には「慰めのひとこと」があれば立ち直れる。

ある人には「楽しめる芸術活動」があれば心が軽くなる

ある人には「聖書の言葉」が届けば生きる意欲を思い出す

それを提供することを「収穫のとき」と重ねることはできないでしょうか。

それによって重大な、深刻な時期を乗り越えて「希望」に生きる道へとすすめる岐路に
なり得るからです。

そのタイミングを逃したら、希望への道が見えにくくなってきます。

でもイエスさまの言葉を借りれば

「収穫は多いが、働き手が少ない。」とのこと。

つまり、多くの場合、私達は、それを「誰かが用意してくれて」「誰かが持ってきてくれる」

「誰かが計画して、誰かが指導してくれる」のをじっと待っているだけということとは
ありませんか。

ほんとは、あなたにもできることがたくさんあるのに、自分が「欲しい」と思うだけで
他者への配慮や他者への支援の心が枯渇してしまっていないですか。

この3年間、礼拝が「集会」という形式では開催できませんでした。悲しく寂しいことです。

でも、ふと考えると、その間、多くの皆様は畑に遣わされて「収穫の働き」に参画する
機会はたくさんあったと思います。

自分が受けて嬉しかったことごとを他の人に手渡しするだけで「収穫のとき」と
なることもたくさんあったと思います。

youtube の礼拝番組を友人にお知らせすることで喜んでもらえた人もおられると思います。それはある意味「収穫」です。

今までは「礼拝にお誘いする」という具体的な方法がとても大事な方法として教えられてきたように思います。教会と結びつけることで、数量化さえできますからそれらを「収穫」と考えている人も多いかもしれません。

しかし、収穫とは教会員を増加させることというより「癒やし」「神による救い、平安、喜び」の共有、生きる喜びを取り戻す出来事を分かち合うことです。それは会堂の中でも起こりえますが、私達の住んでいる場所、働いている場所で起こることごとなのです。心の癒やし、心の喜びは「人間関係」の中で体験されることが多いからです。

あなたはご自分を「働き手」という立ち位置で考えたことがありますか。教会での奉仕者という意味ではなく「神によって選ばれ、周囲の人と平和を作るために遣わされた奉仕者」としての自覚を持ったことがありますか。実は、それこそが私達の中に最も重要な「使命の意識」かもしれません。集会が開催できなかったことで、私達は収穫のための働き手として鍛えられたと言えたら素晴らしいと思います。

2) 平和があるように

不思議なことにこの 72 人の弟子たちは、基本的には「人のお世話になる」ことから学ばなければなりませんでした。

10:3 行きなさい。わたしはあなたがたを遣わす。

それは、狼の群れに小羊を送り込むようなものだ。

10:4 財布も袋も履物も持って行くな。途中でだれにも挨拶をするな。

10:5 どこかの家に入ったら、まず、『この家に平和があるように』と言いなさい。

10:6 平和の子がそこにいるなら、あなたがたの願う平和はその人にとどまる。

もし、いなければ、その平和はあなたがたに戻ってくる。

10:7 その家に泊まって、そこで出される物を食べ、また飲みなさい。

「人の世話になる」「感謝して受け取る」という立場がこの弟子たちにとっての重要な訓練だったのです。

つまり、自分は持っている人間、あなたがたはもたない惨めな人間という「目線」を捨てて、お世話になることから彼らは学ぶ必要がありました。

クリスチャンは時々「持っている側」にしっかり立って、「持っていない人たち」を

憐れむというような姿勢に慣れているかもしれません。「私達は聖書を持っており、教会に所属しており、イエス様によって救われている、私達は持っている。」でも、「彼らは持っていない」と断罪し、彼らも同じ悲しみや苦しみを経験している「人間」であることをいつの間にか素通りしてしまうことさえあるのです。

つまり、私達は自分たちの群れのことばかり考え、教会からの養いばかりを求め自分と同じ人間としての苦勞をしている人たちと付き合うことができなくなってしまふ傾向があるのです。

「いてくれてありがとう」をクリスチャンにも、そうでない人にも分かち合えたらなと思います。

そして、クリスチャンにも、そうでない人にも「平和がありますように」という願いと挨拶を心の中にしっかり持っていたいものだと思います。

それこそが収穫のためのもっとも大切な心になると思うからです。

こちらから声をかけ、こちらから「平和がありますように」「いてくれてありがとうございます」を伝えることができれば、それだけで収穫のための下準備は完了に近いのかもしれない。

私達はそれぞれに生を受け、生かされていますが、それには意味があると思います。

自らの心を豊かにしながら、他者の平和と癒やしのために「声を掛けること」「平和を願い、平和に過ごし、平和を作り出していくこと」

パウロはローマの信徒への手紙の中でこう書きました。

12:10 兄弟愛をもって互いに愛し、尊敬をもって互いに相手を優れた者と思いなさい。

12:11 怠らず励み、霊に燃えて、主に仕えなさい。

12:12 希望をもって喜び、苦難を耐え忍び、たゆまず祈りなさい。

12:13 聖なる者たちの貧しさを自分のものとして彼らを助け、旅人をもてなすよう努めなさい。

12:14 あなたがたを迫害する者のために祝福を祈りなさい。祝福を祈るのであって、呪ってはなりません。

12:15 喜ぶ人と共に喜び、泣く人と共に泣きなさい。

12:16 互いに思いを一つにし、高ぶらず、身分の低い人々と交わりなさい。自分を賢い者とうぬぼれてはなりません。

12:17 だれに対しても悪に悪を返さず、すべての人の前で善を行うように心がけなさい。

12:18 できれば、せめてあなたがたは、すべての人と平和に暮らしなさい。

これはまさに「収穫のために遣わされて世に生きるすべての人」が心に留めるべき言葉だと思います。

MACF 礼拝映像はこちらです。

<https://youtu.be/9gDRTQv-jJA>